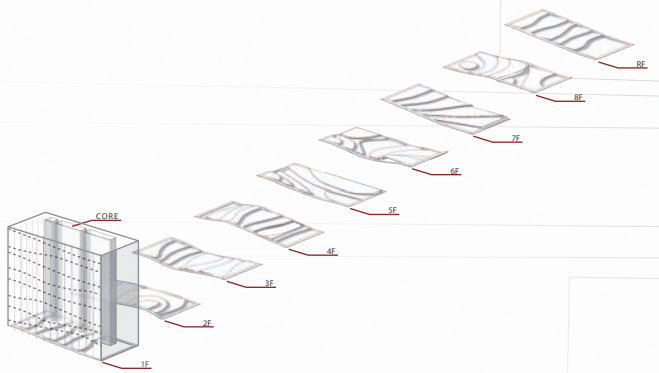
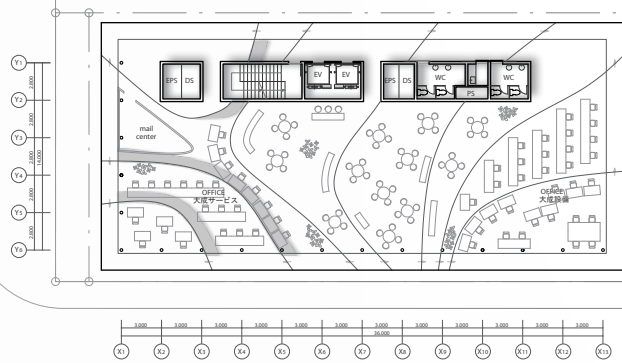
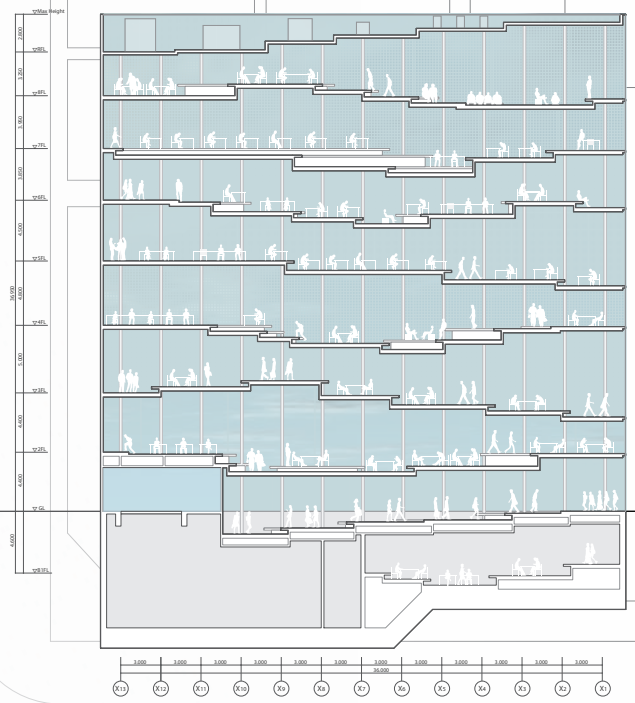




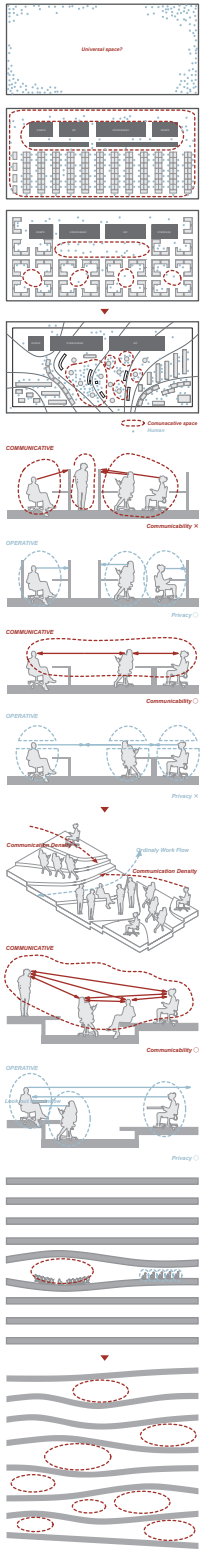
4F PLAN : S=1/400



SECTION : S=1/400

場を宿す

activity　affordance　distance　relation　shift　flexibility　partition　concentration



この図は現代におけるオフィス計画の基本原則を表したものです。
「 空間は機能に従う」という大原則から、用途や人員の変更に機能が追従できるような可変性と均質性を持つオフィスが優れたオフィスとされているのです。

今までとは異なる新しいオフィスの空間構成を考えるに当たり、私達はこの基本原則を否定するところから作業を始めました。
建築作品は経済の余剰から生まれるという性質上、この基本原則を守る限り、建築計画は経済効率の追求にしかならないと判断したからです。

そこで基本原則を逆さまに読むとこうなります。
可変性を永続性に、均質性を不均質性に、「機能から空間が生まれる」を 空間から機能が生まれる」と読み替えました。そしてこの 反原則」を検証する事により新たなオフィス空間を模索しました。

「 機能から空間が生まれる」
私達は、物理的な身体と並行して、コミニュケーションよって発生する身体感覚に着目しました。
不特定多数の人物が会議などでコミュニケーションを共有する場合、そこに個人の身体とは別に共同体としての身体感覚が現れます。
モノロジカルな作業であるデスクワークと比べて、より多くの情報が伝達される共同体としての身体はより大きい空間を要求するのではないかと仮定し、天井と床を広げてみました。

各階の平面をレイアウトし、コミニュケーションによる身体を落としこんでいくことで、ビル全体がまるで地層のようなうねりを持つことになります。上下階での干渉を考慮し、調整を進めることによりひとつのモデルが誕生しました。

これを等高線モデルと名付けることとします。
プランニングにおいては、各フロアは等高線状の段差を持つこととなりました。この等高線はコミニュケーションの濃度によっているので、等高線に平行に同一の性質を要求する空間が並びます。また等高線を縦断する事で、異なるコミュニケーションレベルの空間(執務空間、3~4人のミーティング、会議室)へと移動できます。
「等高線モデル」は空間の性質を規定しますが、機能を規定するわけではないので、フロア配置は可変的ですが、コミュニケーション濃度の異なる空間を連続的に配置する事で、思っても見なかったようなコミュニケーションが生まれます。つまり 空間から機能が生まれる」のです。

オフィス計画の基本原則に従った代表的な平面計画としてこの二つのモデルがあります。平机を島状に並べた島型レイアウトと、パーティションでブースを配置した、パーティション型レイアウトです。単一のモジュールを規則的に並べることにより、可変性を確保しています。フロアのどこを取っても均質のレイアウトになっているので、自由に並べ替え可能というわけです。

しかし、ここに人間をプロットしてみると、空間構成に自由度が無いことが良くわかります。島型レイアウトでは、フロア全体が密度の低いコミニュケーション空間となり、プライベートな空間がありません。一方、プライベートな空間を確保したパーティション型レイアウトでは、コミニュケーションスペースと個人のブースがスムーズに連続しないので、創造的なコミニュケーションの偶発性はありません。また、フロアのどこを取っても同様の空間となっているため自分だけの独自の空間とはなりません。

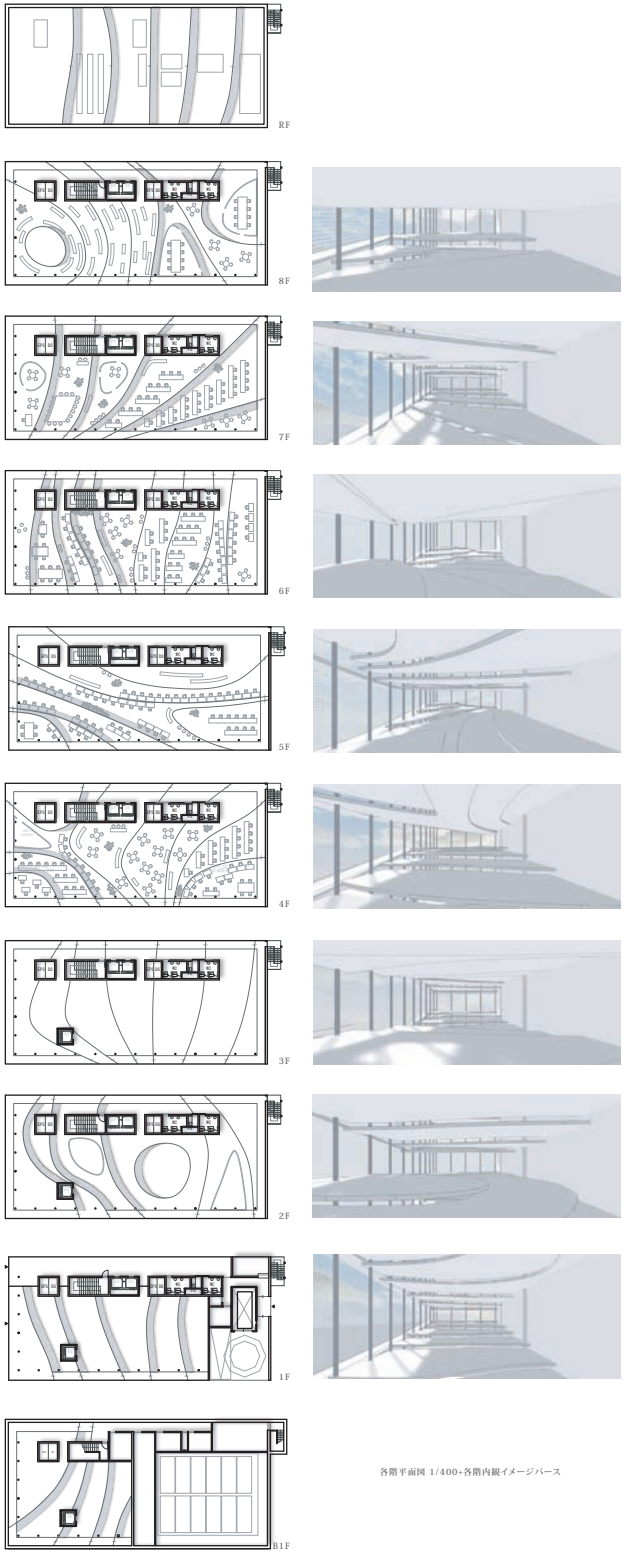
等高線モデルによるフロアレイアウトでは、個人の執務スペースは原則的に等高線の高い位置にあります。ミーティング等で他者との情報交換の必要が生じた場合、コミニュケーションレベルの高い、つまり等高線の低い位置に移動すればよいのです。フロア配置は、この原則以外は自由となるので変化に富み、フロアのどの位置にいてもひとつとして同じ空間はありません。

また等高線モデルは、コミュニティー重視型の島型レイアウトとプライバシー重視型のパーティション型レイアウト双方の利点を併せ持っています。
個人の作業空間を検証してみると、島型レイアウトでは、共同体としてのコミュニケーションはとりやすいものの、個人としての作業空間に常に他人の視線が介入するため、プライバシーを持つことが出来ません。

一方、パーティション型レイアウトでは、個人の作業スペースのプライバシーは守られますが、フロア内でのコミュニケーションが取り難く、また窓の外の風景を眺めることも出来ません。

等高線モデルでは、これらの問題を時間軸を分けることにより解決しています。
執務空間にパーティションはありませんが、一人一人の視線のレベルが違うので、視線が貫入する事がありません。外の風景を眺めることも出来ます。
段床のレベル差はそこが、収納、臨時のテーブル、ベンチとして使用可能な高さに設定されているため、臨時で会議を始めるとしても空間的な制約はなく、コミニュケーションに参加する人たちによって自然にその領域が決まり、偶発的に情報交換が出来るのです。

これが「空間が機能を生む」ということです。



各階平面図 1/400+各階内観イメージパース